優秀賞

一般 文章（手紙・作文）部門

「落ちる穴もない」

長崎県大村市
安井 由加子

「心配するな。お前に落ちる穴は、もうない」私の魔法の呪文だ。唱えるとほっと息を吐いて、また前に進める。

結婚はしないつもりだった。ひとりが気楽だし、なにより仕事がしたかった。やっと仕事が軌道に乗った頃、彼に出逢った。最初はお互い、そんな意識もなく、ただの仕事仲間。失敗して、よく怒鳴られたっけ…。それでも次第に二人で過ごす時間が増え、いつのまにか、生活を共にしていた。人生は全くわからないものだ。入籍後、すぐのこと。新しい仕事が次々と決まりだした。不規則な生活が続いても、文句ひとつ言わず、がんばれ。お前なら出来る、と送り出してくれた。深夜に帰宅すると、〝先に寝る、おやすみ。朝は寝てろ。おはよう、いってきます〟と次の日の朝の挨拶まで書かれた手紙が置いてあったときは、さすがに申し訳ないなと反省した。翌日、ごめんねと謝ると、彼はなにが？　と笑った。その笑顔をみて、ふと涙が出た。「私、こんな理解されて、幸せで大丈夫かな？　なんかそのうち、でっかい落とし穴に落ちたりしないかな」急に不安になってそう呟いた私に彼は、きっぱりと言った。

「大丈夫だ。お前にはもう落ちる穴もない」きょとんとしていると、さらに、続けた。

「お前、不器用でいいことなしで、今まで、散々失敗してきたろ？　用意された穴、みいんな落ちまくってきたろ。もう、穴掘るほうが大変だよ。だから、大丈夫だ!!」

褒めてるんだか、けなしてるんだか、よくわからないけど、妙に説得力があって思わず、吹き出してしまった。

「なんだよ。下手に慰めたらどうせまた不安になるだろ？　それに本当のことだ。なぁ、そんなことより、明日は休みだろ？　ビール持ってきてー」

よくわかってらっしゃる。この人には一生敵わない。最強のパートナーに出逢えたことに感謝して、台所でまた泣いてしまった。